

## プーチン大統領のための弁明

Greatchain

December 25, 2023

わが国一般のプーチン大統領に対する悪意が、あまりにも馬鹿げているので、「スプートニク日本」から、プーチン自身の「**米国は意図的にロシアと欧州をウクライナ紛争に〈引き込んだ〉**」という言葉を用いて、私見を述べることにする。「スプートニク日本」がこれを長期間載せているのは、これを重要と考えるからであろう。その趣旨は簡潔にこう述べられている：――

ロシアのプーチン大統領は 19 日、ロシア国防省の幹部らが参加した拡大会合で、米国は、通常の政治的な方法でウクライナと関係を構築する機会をロシアから奪い、意図的にロシアと欧州をウクライナ紛争に引き込んで目的を達成したが、モスクワには他に選択肢がなかった。

これを我々の言葉でわかりやすく言うと「はめられた」ということである。プーチンはこれを正直にありのままに言っている。これは、はめられた彼が悪い、と言えないことはない。(徹底した反プーチンは、それはお前が馬鹿だからだ、ざま見ろ、というかもしれないが、それはほっておこう。) これは、彼が奸計を見抜けなかったということだが、彼の誠意がそこまで人を疑っていなかった、ということでもある。

あの時のことを思い出していただきたい。「これ以外に方法がなかった、理解してほしい」と彼は国際社会に向かって言った。それは同胞（言語も人種も風習も完全にロシア人である人々）が残酷に殺されている現状を、大統領として放置できなかったという意味である。そして彼は、侵略行為（とはいえネオナチ退治）は最低限にして、後は、「ミンスク合意」といわれた、ウクライナを含めた西側とロシアの話し合いによって、乗り切れると思った。これは当時、「侵略」行動を詳しく説明した、元米陸軍大佐ダグラス・マグレガーの報告で語られている。しかし、ロシアは目の前でその合意を踏みにじられた。それはそもそも、NWO グローバリストの計画ではなかったからである。(こういうことを我々は故意に知らされなかった。)

実はそのあたりまで、プーチンとロシアは、西側とアメリカの良識をまだ信じていたと思われる。つまり、お人よしの馬鹿だった。それ以後は誰もが知る通り、ロシア側は態度を

硬化させ、アメリカと西側はゼレンスキーと一緒にあって、ウクライナ人を暴力装置に強制し、**君たちは死んでもよいからロシアをやっつける使命を全うせよ**、と言いつけている。ここでもう一つ、今度は、ラヴロフ外相の名言を引用しておこう：——「**西側諸国は自分たちがロシアに対して始めた戦争の行き詰まりを、認識するときがきた**」

しかし、彼らが本当の人類の敵であることを証明し出したのは、11月7日、イスラエルが子どもたちや病院を、選んで攻撃しにかかったときである。なぜこういうことをするか？人類の戦争の歴史でも、こういうことはめったになかったであろう。これは彼らの**神に対する腹いせ**だとしか説明できないだろう。それは、**神を憎み骨抜きとするためには、最も有効なやり方**だと考えられる。これは我々がこのブログで、長年、論じてきたことである。

我々日本人には一般に、サタンとか神とかいうと、意味が分からず、ただ反発する人々が多い。しかし今、我々はいよいよ追い詰められて、「神」と直接対決せざるを得なくなった。いつも使う比喻で言えば「自由選択科目」の余地はなくなった。これは死活問題だからである。そして、そのこと自体が「神」の戦略であったと考えることができる。神は指図することはできず、我々が気づくのを待つしかない。

話は飛ぶようだが、この神の問題を徹底的に考えた偉大な作家は、ドストエフスキーというロシア人だった（彼は特に子供虐待に敏感だった）。そして、ロシア民族すなわち祖国に対する責任を、最も深く自らに刻み付けているのは、プーチンのようなロシア人である。トルストイの『戦争と平和』に登場する「クツーツフ将軍」——茫洋として何を考えているかわからない、ただ祖国ロシアだけを考えている人物——について感動をもって読んだ人は少なくないだろう。ロシアという国は、ナポレオンとナチス・ドイツによる二度にわたる侵略を受け、想像を絶する多大の犠牲者を出しながら、最後には押し返して勝利し、この国を立ち上がらせた。ロシア人は誰一人これを忘れてはいないだろう。プーチンをクツーツフ将軍に、私はずっとなぞらえてきたが、ウクライナ紛争が始まったとき、まさにその通りことを主張する人がいて、私はそれを指摘したことがある。じっと耐える聡明な人格者というプーチン像には、そのような背景がある。

これに対して、ウクライナのゼレンスキー大統領はどうか？ もし彼が（日本人が間違っ

て考えるように）祖国と人民を愛するような人であったら、仮にいざごきはあっても、決してこんなことにはなっていなかった。彼は想像とは正反対の、ナチス国家主義者で、意図はどうであれ、国を滅ぼすだけの大統領だった。それをようやく世界が認めるようになった。まず彼は、狂気のようにロシア語とロシア文化を禁止している。もちろんトルスト

イもドストエフスキーも追放された。これによって祖国愛が育つと考えたら大間違いである。(このゼレンスキーの言語政策を認めようとするわが国のメディアは、考えてみるがよい。)次に彼は、祖国の魂であるはずのウクライナ正教を、はっきりと弾圧し始めた。(これについても、「神」法度のわが国は、ひそかに賛成するかもしれない。神を禁止すれば科学が育つか? AIが育って神が不要になれば、国が栄えるか?)

そう考えているときに、「**日本が武器禁輸を解除、これがウクライナに入る可能性あり**」<https://www.rt.com/news/589592-japan-patriot-missiles-us-ukraine/>という RT のニュースが入った。

これでどう批判されようと、世界情勢がどう変わろうと、日本政府の路線は頑として全く変わらないことが明らかになった!!——

(以下、見出しと記事) **東京 (日本政府) はパトリオット・ミサイルをアメリカに送った——これは完全な再軍備への新たな一歩だ。**

日本は、パトリオット・ミサイルをアメリカに供与することを合意した。これは 1947 年同国の平和憲法下で規定された軍事輸出禁止の、終わりを意味するものである。この動きは、現在のウクライナ紛争中に腐食したワシントンの大量の貯蔵兵器を、補って援助することになる。

金曜日に日本政府で確認されたアメリカへの兵器売却は、第二次大戦以来、初めての致命的兵器の輸出となる…。